

## 令和四年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国語

(その一)

注意 解答欄は問題用紙の(その六)・(その七)にあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

セミの死体が、道路に落ちている。

セミは必ず上を向いて死ぬ。昆虫は硬直すると脚が縮まり関節が曲がる。そのため、地面に体を支えていることができなくなり、ひっくり返ってしまうのだ。

死んだかと思つてつついてみると、いきなり翅をばたつかせてみたりする。最後の力を振り絞つてか「ジジジ……」と体を震わせて短く鳴くものもいる。

別に死んだふりをしているわけではない。彼らは、もはや起き上がる力さえ残っていない。死期が近いのである。

仰向けになりながら、死を待つセミ。彼らはいつたい、何を思うのだろうか。

彼らの目に映るものは何だろう。

澄み切った空だろうか。夏の終わりの入道雲だろうか。それとも、木々から漏れる太陽の光だろうか。

ただ、仰向けとは言つても、セミの目は体の背中側についているから、空を見ているわけではない。昆虫の目は小さな目が集まつてできた複眼で広い範囲を見渡すことができるが、仰向けになれば彼らの視野の多くは地面の方を向くことになる。

もつとも、彼らにとつては、その地面こそが幼少期を過ごしたなつかしい場所でもある。

「セミの命は短い」とよく言われる。

セミは身近な昆虫であるが、その生態は明らかにされていない。セミは、成虫になってからは一週間程度の命と言われているが、最近の研究では数週間から一ヶ月程度生きるのはないかともいう。

とはいえ、ひと夏だけの短い命である。

しかし、短い命と言われるのは成虫になった後の話である。セミは成虫になるまでの期間は土の中で何年も過ごす。

昆虫は一般的に短命である。昆虫の仲間の多くは寿命が短く、一年間に何度も発生して短い世代を繰り返す。寿命が長いものでも、卵から孵化して幼虫になってから、成虫となり寿命を終えるまで一年に満たないものが、ほとんどである。

その昆虫の中では、セミは何年も生きる。じつは長生きな生き物なのである。

一般に、セミの成虫は土の中で七年過ごすと言われている。そうだとすれば、幼稚園児がセミをつかまえたとしたら、セミの方が子どもよりも年上ということになる。

ただし、セミが何年間土の中で過ごすのかは、実際のところはよくわかっていない。何しろ土の中の実際のようなすを観察することは容易ではないし、仮に七年間を過ごすとしたら、生まれた子どもが小学生になるくらいの年数観察し続けなければならない。そのため、簡単に研究はできないのだ。土の中の生態については、未だ謎が多いのである。

それにしても、多くの昆虫が短命であるのに、どうしてセミは何年間も成虫になることなく、土の中で過ごすのだろうか。セミの幼虫の期間が長いのは、理由がある。

植物の中には、根で吸い上げた水を植物体全体に運ぶ導管と、葉で作られた栄養分を植物体全体に運ぶ篩管とがある。

セミの幼虫は、このうちの導管から汁を吸っている。導管の中は根で吸った水に含まれるわずかな栄養分しかないもので、成長するのに時間がかかるのである。

一方、活動量が大きく、子孫を残さなければならぬ成虫は、効率よく栄養を補給するために篩管液を吸っている。ただ、篩管液も多くは水分なので、栄養分を十分に摂取するには大量に吸わなければならない。そして、余分な水分をおしっことして体外に排出するのである。

令和四年度徳島文理中学校後期入学試験問題

第一限 国語

(その一)

② セミ捕り網を近づけると、セミはあわてて飛び立とうと翅の筋肉を動かし、体内のおしっこが押し出される。これが、セミ捕りのときによく顔にかけられたセミのおしっこの正体である。

夏を謳歌※するかのように見えるセミだが、地上で見られる成虫の姿は、長い幼虫期を過ごすセミにとっては、次の世代を残すためだけの存在でもある。

オスのセミは大きな声で鳴いて、メスを呼び寄せる。そして、オスとメスとはパートナーとなり、交尾を終えたメスは産卵するのである。

これが、セミの成虫に与えられた役目のすべてである。

繁殖行動を終えたセミに、もはや生きる目的はない。セミの体は繁殖行動を終えると、死を迎えるようにプログラムされているのである。

木につかまる力を失ったセミは地面に落ちる。飛ぶ力を失ったセミにできることは、ただ地面にひっくり返っていることだけだ。わずかに残っていた力もやがて失われ、つついても動かなくなる。

そして、生命は静かに終わりを告げる。死ぬ際に、セミの複眼はいつたい、どんな風景を見るのだろうか。

あれほどうるさかったセミの大合唱も次第に小さくなり、いつしかセミの声もほとんど聞こえなくなってしまった。気がつけば、まわりにはセミのむくろが仰向けになっている。夏ももう終わりだ。

季節は秋に向かおうとしているのである。

(稲垣 栄洋『生き物の死にざま』)

注

※ 謳歌……自分の境遇きょうぐうに満足し、それを十分に楽しむこと。

※ むくろ……死がいの。なきがら。

問一 —— 線部①「多くの昆虫が短命であるのに、どうしてセミは何年間も成虫になることなく、土の中で過ごすのだろう」とありますが、その理由を五十字以内で答えなさい。(句読点なども文字数に数えます。以下同じ。)

問二 —— 線部②「セミ捕り網をくおしっこの正体である」とありますが、体内のおしっこの正体は何か。五十字以内で答えなさい。

問三 —— 線部③「ただ地面にひっくり返っている」とありますが、なぜひっくり返るのか。セミの体の構造を考えて、その理由を六十字以内で答えなさい。

問四 筆者は成虫のセミの生きる目的は何であると考えているか。本文中から四字で書き抜きなさい。

問五 —— 線部④「死ぬ間に、セミの複眼はいつたい、どんな風景を見るのだろうか」とありますが、それについてあなたはどんな風景だと考えますか。五十字以内で答えなさい。

## 令和四年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国語

(その二)

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【これまでのあらすじ】

メールストレームと呼ばれる場所は大うずが巻き、漁師には恐れられる難所であったが、たった一日で一週間分がかせげるほどのすばらしい漁場だった。それで、私たち兄弟は危険と背中合わせの漁にいどんでいた。メールストレームの難所をつつ切るときには、潮の満ち引きの変わり目にうず潮よどみが来る時間を見すまして、通り抜けなければならない。このタイミングを見あやまると、大うずに巻き込まれてしまう。しかし、七月のある日、天候が急変し大あらしに巻き込まれてしまう。マストをもぎ取られ、大あらしにほんろうされて、兄弟の乗った船は恐ろしいメールストレームに近づきすぎてしまった。

兄が、ぐつと口をわたしの耳に近づけて、たったひと言、

「メールストレームだぜ！」

メールストレーム！ わたしは頭のでっぺんから足の先まで、おこりのように震えました。わたしたちは、まっこうから、メールストレームの大うずまきに突進してゐるのです。もはや助かりっこはありません。

そのころには、あらしも初めの激しきは衰えたようでしたが、風に押えられて平らにあわを立てていた波は、今や山のようなうねり波になっていました。それに、奇妙なことには、これまであたり一面、漆のようにまっ暗であったのが、突然、天の真上のあたりがぼっかり丸く裂けて、まっさおに澄んだ空に、おりからの満月があざやかに輝いてゐるではありませんか。そして、その青白い光は、あたり一面をくつきりと照らし出しました。

一、二度わたしは兄に話しかけましたが、どういうわけか、あたりの物音がひどく高まって、兄はひと言も聞き取れないらしいのです。やがて、兄は頭を振って、死んだように青ざめながら、「聞いてごらん。」というように、指をさし伸ばしました。初めのうち、わたしはそれがどういう意味かわかりませんでした、すぐに恐ろしい考えが心にひらめきました。わたしはズボンのかくしからとけいを出しました。月の光で見ると、七時で止まっていたのです。わたしはとけいを海へ投げ込みながら、声をあげて泣きました。とけいが止まっていたために、わたしたちはよどみに遅れて、うずは今、荒れ狂う絶頂なのです。

なるほど、それまでは、わたしたちはうまくうねり波に乗って来ました。しかし、今やとてつもない大波が、ともの方から船体をぐいぐい持ち上げておいて、どすんとさか落としをくらわすのです。わたしはくらくらとめまいがして、吐きけを催しました。しかし、ぐんと持ち上げられた瞬間、すばやくあたりを見回しました。それだけでじゅうぶんでした。メールストレームの大うずまきが、すぐ目の前に迫っていました。わたしは恐ろしさに、思わず目を閉じました。目をつぶって二分とたたないうちに、わたしは、波がぐつと静まるのを感じました。海はあわだらけとなりました。船はとたんに、左舷に半回転して、新しい方向へいわずまのように走り出しました。わたしたちはいよいよ、うずまきの外縁の、あの砕け波の帯のまっただ中に乗り入れたのでした。

ところで、不思議なことに、もうとうていだめだと決まってしまったら、かえって気持がおちついて、恐ろしさもだいぶ薄らいできました。わたしは、こうして死ぬのは、なんというすばらしいことだろう、この大自然の荘厳な活動から見れば、わたしひとりの命のことを考えるなんて、なんというばかげたことだろうと思いはじめました。そのうちに、わたしはうずに対して、鋭い好奇心を起こしてきました。そして、たとえわたし自身が今その犠牲になろうとも、ぜひその底を探ってみたいと思いました。わたしは、わたしが見るであろう神秘を、陸に残っている親しい友だちに話すことができぬのを、何より悲しく思いました。——こんな危急の時に、こんな考えが心に浮かんだことが不思議で、わたしは今でも時々、あの時は頭が少し

## 令和四年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国語

(その四)

狂っていたのではないかと考えるほどです。

風はしないできました。わたしどもは、ぐるぐるぐるぐる回って、やがてうずまきの外縁の、砕け波のところを通り過ぎようとしていました。わたしはむろん、輪くぎにつかまったままでした。兄は、どもの張り出しにしっかりと縛りつけられた、小さなからの水おけにしがみついていた。甲板上で波にさらわれなかったものは、この水おけだけでした。いよいようずまきの穴に落ち込もうとした時、兄はふと、このおけを放して、わたしのつかまっている輪くぎの方へはいずって来ました。輪くぎは小さすぎて、ふたりがつかまるわけにはいきません。兄は夢中になって、わたしの手をかきのけようとしました。かれは恐ろしさのあまり、気が転倒していたのでしようが、わたしは、言いようのない、悲しい気持になりました。しかしわたしは、これにあらがおうとはしないで、輪を放して、ともの水おけにつかまりに行きました。(中略)

もうだめだ！ 船がぐくと落ち込んで行った時、わたしは思わずおけにしがみついて、目を閉じました。いよいよ破滅の瞬間が来た、と思ったからです。しかし、一瞬、また一瞬、わたしはまだ生きているではありませんか。しかも、ずり落ちるけはいもなく、船の動きも、よっぽど穏やかになったではありませんか。わたしは恐る恐る、もう一度、目をあけて見ました。

わたしは、あの時の光景を一生忘れないでしょう。こわいというか、おごそかというか、なにしろすばらしい光景でした。船は、すばらしく大きな直径を持った、おそろしく深い漏斗の側面の中途のところに、魔法か何かでぶらさがっているようにした。その漏斗のなめらかな表面は、つややかに輝きながら、ただ目が回るほどぐるぐる回っているのです。頭上の丸い雲の裂け目からは、満月の光が、黒々としたうずの壁にこうこうと降り注いでいます。

下を見れば、うずまきのどん底まで、手に取るようにはつきりと見ることができました。水面は四十五度以上も傾斜して、その傾斜面に、まるで平面に浮かんでいるように、平均を保ってわたしたちの船は漂っているのです。しかもその傾いた甲板の上に、わたしは、遠心力のために、まるで平地に立っていることもできました。

月の光は、うずまきの深い深い底の方まで照らしていましたが、どん底のあたりには、もやもやと霧が立ちこめて、すばらしいにじがかかっています。その霧の中から起こる大鳴動が空高く響き渡るものすごさは、とうていことばに言い表わすことはできません。

しばらくの間、わたしはこの壮大ななぐめに見とれておりましたが、やがて気がついて見ると、黒光りするうずの側面に漂っているのは、わたしたちの船ばかりではありませんでした。わたしたちより上の方にも、船の破片だの、太い丸太だの、いろんなものが浮いています。家具や、たるや、箱のこわれも漂っています。わたしは、破滅に近づけば近づくほど、いよいよ好奇心がつのり、深い興味をもって、それらの物が、うずの壁にくっついたようになってぐるぐる回っている間に、底へ底へと吸い込まれて行くのを見守りました。そのうちに、それらの物が底へ落ちて行く速さが、それぞれ違っていることに気がついてきました。それで、どういう物が速く落ちるかを見ていますと、第一に、形の大きい物は小さい物より速いのです。第二に、同じくらいの大きさでは、丸い物は、丸くない物より速いのです。最後に、円筒形でない物は、円筒形の物よりも速いのです。わたしたちの船がうずの壁について回っている間にも、わたしどもは時々、たるや帆柱のような物のそばを通りましたが、これらの物は、初めわたしたちと同じ高さにあったものが、今はわたしたちよりずっと高い所にあつて、もとの場所からほんの少ししか落ちていないように見えるのです。それがわかると、わたしはもう一度、心臓がどきどき打ちだすのを感じました。今度は恐れのためではなくて、すばらしい希望が心の一角にきざしたからです。

もうためらうことはありません。わたしは、わたしのしがみついているからの水おけにしっかりと縛りつけて、水の中へ飛び込もうと決心しました。わたしは兄にも合図して、近く流れ寄って来たおけを指さして、わたしのしようとしている

## 令和四年度徳島文理中学校後期入学試験問題

## 第一限 国 語

(その五)

ことをわからせようとほねおりました。けれども、あたりがごうごうと鳴りどよめいているので、叫んでもどなっても、なかなか兄の耳にははいりません。それでもしまいには、兄もわたしの言うことがわかったようでした。しかし、あきらめきつたかれは、絶望的に頭を振って、輪くぎから離れようとはしませんでした。

わたしは、もはや一刻もぐずぐずできません。心を鬼にして、兄をその運命に任せ、ざぶんと海の中へ飛び込みました。

事の結果は、わたしの思ったとおりでした。それから一時間ばかり漂って、わたしがまだ半分も落ちて行かないうちに、船はぐんぐん巻き込まれて行って、二、三度きりきり舞いをしたかを見ると、兄を載せたまま、まつさかさまに吸い込まれて、それっきりになってしまいました。

まもなく潮向きが変わる時刻が来ました。漏斗の傾斜はだんだんに直り、うずの底が持ち上がりはじめました。やがて、口フオーテン諸島の姿が、もう一度、目にはいつて来ました。海にはまだかなりのうねり波がもつれていました。あらしはもうやんでいたのです。そしてわたしは、速い潮流に運ばれ、ほかの漁師たちの行く普通の漁場のあたりに流れ着いて、知り合いの漁師に救い上げられたのでした。しかもかれらには、すぐにはわたしだということがわかりませんでした。きのうまで黒々としていたわたしの髪の毛が、雪のようにまっ白になって、まるで別人のようになっていたからです。

(エドガー・アラン・ポー作 岩田欣三訳「大うずまき」)

注

- ※ おこり……寒さやふるえや高熱が一定の時間をおいて繰り返かえされる病気。
- ※ とも……船の後方の部分。船尾。
- ※ 左舷……船尾から船首に向かって左側のふなばた。
- ※ 漏斗……上が広く、下が細くすぼまって穴のある金属または木・竹製の器。じょうご。

問一 ——線部①「わたしはとけいを海へ投げ込みながら声をあげて泣きました」とあるが、なぜ「わたし」はとけいを海に投げ込んだのですか。七十字以内で書きなさい。(句読点なども文字数に数えます。以下同じ。)

問二 ——線部②「かえって気持がおちついて」とありますが、なぜ「わたし」の心がおちついてきたのでしょうか。五十字以内で書きなさい。

問三 ——線部③「今度は恐れのためではなくて、すばらしい希望が心の一角にきざしたからです」とあるが、①「すばらしい希望」とはどんな希望ですか。四十字以内で書きなさい。

②「わたし」の心に①のような希望がわいてきたのは、どのようなことがわかったからですか。八十字以内で書きなさい。